

〔紹介〕

G・J・スチグラー

「科学的進歩における独創性の性格と役割」

George J. Stigler: The Nature and Role of Originality in

Scientific Progress, *Economica*, Vol. XXII

No. 8 *pp.* 293~302 November 1955

浜 崎 正 規

序

J・A・シユムペーターの遺稿である「経済分析の歴史」(『History of Economic Analysis', edited Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954)は、

学史の方法論ならびに経済思想史の研究分野に反省をなげかけたものともみなければならぬ。わが国においてもすでに有能な諸学者達によって紹介され、また種種の角度から批判もされてきている。シユムペーターはその冒頭で明らかにするように、経済分析の歴史をもって経済現象を理解するために人間が試みてき

G・J・スチグラー「科学的進歩における独創性の性格と役割」(浜崎)

一〇五(九六三)

知的努力の歴史（*the history of the intellectual efforts*）を意味し、それを別の言葉でいえば経済思想の分析的ないし科学的側面の歴史（*the history of the analysis or scientific aspects of economic thought*）を内容とする。

ところで科学的分析は、ただ単に若干の素朴な觀念から出発し、しかる後に觀念の既成のストックにそのまま附加せられるような、一つの論理的に一貫した過程ではなく、また単に客観的な實在の發見を積み重ねていくといったものではないのである。いわばむしろわれわれ自身やわれわれの先輩の心の創造物とのたえまない斗争であつて、もしも進歩があるとしても、それは交叉状態（*a criss-cross fashion*）においてであり、論理が指令するままのものではなくて、新しい觀念、新しい觀察、新しい要求が与える衝擊の結果として、さらに新しい人間の傾向や氣質の結果として、生れるものである。（*Ibid.*, p.4）

たとえかような思想的契機のもとに生成したにもし

ろ、今日のわれわれからする過去のいわゆる知的努力の歴史は、まさに広大な山脈となつてまみえてくれるのである。異つた時代に異つた肌合の事実や問題に直面してとつた経済分析のそれぞれのすがたこそ、シェムペーターの「窓」とおしていえば、時間的、空間的に規定されたまさにラディカルな思想的側面であるといわねばならないであらう。それにしてもシェムペーターが、科学的経済学は、歴史的連続性に缺けることなく、そこには科学的な諸觀念の系統化（*Filiation of Scientific Ideas*）の過程—経済現象をば理解せんとする人間の努力が、無限の連続のなかに、分析装置（*analytic structure*）を作り出し、改良し、破壊していく—が存在するという時、われわれはこの過程なるものの構造についての彼の説明にすこしも問題をみいださないというわけではない。そのことはいまの場合問わない。ところで現象をば理解せんとする人間の知的要求は、科学的知識の形成、いいかえれば道具化さ

れた知識 (tooled knowledge) への昇化過程をたどること。そうして道具化された知識は、その反面降化過程すなわち普遍化の過程に入らざるをえないこと。われわれはこの二つの過程にいわゆる「歴史的」な思想

の性格を把握できると考える。しかもこの後者の過程にこそ道具化された知識の時間的、空間的限界性なるものが明らかにされなければならないと思われる。またそこにおいてその知識がいかなる内容的モメントをおよび形成されるにいたったのか等の問題が真に明らかにされると考えられる。そういった問題意識をもつてシュムペーターの「科学的観念の系統化」なるものを考察するならば、それは単なる歴史の連続性とはいえないのではなからうかと思われる。こういった問題に沿ってここに紹介するスチグラ―氏の所論を追ってみよう。氏は科学の進歩における独創性の問題に焦点をおく。そのためにその独創性の性格と役割を論じるわけであるが、ある意味ではシュムペーターのいう道

具化された知識への作業意識、ならびに科学的な諸観念の系統図をば独創性なる要素をもって切断し、その断面図をわれわれにしめしてくれたものとみることができる。

以上紹介者の意図するところを極めて簡単に述べたわけである。ところで紹介者はスチグラ―氏についてその人柄、業績等を紹介する資料を全くもたない。ただコロンビア大学の教師なることを附言しておくにとどまる。

この論文は一九五五年十一月発行の「エコノミトリカ」誌の巻頭に掲げられたもので四章からなっている。最初に独創性の意味を尋ね、次に説得技術(普遍化の技術)を説明し、続いてその実例としてJ・S・ミルの場合をあげて具体的に考察し、最後に科学的進歩と独創性の関係を反省して結びとする。われわれは氏の敘述にしたがってその骨子を紹介しよう。

× × ×

経済学の領域にわれわれは偉大な獨創性のたくわえをもっている。それにいま心をかけてみると、クルノーは獨創的であつたが故にすぐれた経済学者であつたといえよう。しかしミルは獨創的でなかつたがために偉大な解説者であつたといえても、すぐれた経済学者とはいえない。こういつた考え方の態度は、何人かが獨創的でもかも巧妙な背理であるが故に、その人を讚美するという窮地にしばしばわれわれをおちいらしめるのである。このような場合には、われわれは發生的精神のいできてとしての人間となつてゐるのである。それにしても著名な経済学者達をそれぞれの獨創的な學説をもつて想起したいものである。例えばジェボンズの限界効用、ワルラの一、般、均、衡、等のように。したがつてもし人と一緒に標語を想起することができないならば、われわれはその人に獨創性を否定するようになる。

以上のように獨創性なるものと人との關係を最初に

とりあげるスチグラー氏は續いて獨創性なるものの評價を提起する。すなわちそれは立派な価値であるが、ほとんどの議論が認めてゐると思われれるものよりも一層錯雜な価値である。したがつて科学的進歩における獨創性の役割を述べ、あるいは評価するということは容易なことでない。

ここで明らかにされたように、一体獨創性なるものの意味は、われわれが發生的精神のいできてとしての人間になつてのみ、みいだされるものなのか。次にその獨創性なるものの価値はどのような価値であるのか。それが明らかになされると、科学的進歩において獨創性はいかなる役割を演じるのか。等々に反省をなげかけてみようとするのがこのスチグラー氏の論稿の意図するところと思われる。

一 獨創性の意味

獨創性なるものは、最も單純な意味としては、アイディア思想

の陳述において、現世的優先性^{デシボラ・プリマチ}をもつものである。例え

ばマーシャルの需要の弾力性 $\frac{dq}{dp} \cdot \frac{p}{q}$ あるいはクル

ノーの複占理論の展開等。こういった意味において彼等はまさに独創者であるといえる。ところでクルノー

のそれを Bowley は、複占者の生産高の变化率を競争相手の生産高にかかわらして導入することにより分析の普遍化に努力する。しかしながら Bowley のクルノーの普遍化は、Kotany によってあらかじめ形成されてきていたとみなければならぬ。 ("Suggestion

on the Theory of Value", Quarterly Journal of Economics,

XIX 1904-96, pp. 583-84) したがって私はクルノーの複

占理論に関する論議以前に、それについての立派な論議をしらないが、しかしクルノーの論議のうちに、その複占理論のすべての内容があるわけではない。

以上独創性なるものを明らかにしてやるスチグララー

氏は、たとえそれが、思想の陳述における現世的優先性にあるとしても、思想が技術的明確性ならびに高度に

専門的な分析以上のものである場合には、その優先性

は薄いしかも不明なものであるという。例えば限界

効用逓減、報酬逓減あるいは雇傭条件下の均衡理論等

を何人が最初に発見したかもしらないけれども、かような思想は、それらを重要になさしめた人人によって論

述される以前に、長い歴史をもっているということは

一般的知識である。とすれば科学的思想の過程にとつ

て影響をなす意味において、何人が「発見」の先鞭を

みい出すことができるというのは偶然事とはいえない

のである。したがっていつでも、いくつかのある種の

科学的見解の流れが存在するとみなければならぬ。

スチグララー氏はこのように述べてきて後、その科学的

見解の流れのうちにある人間類型を分類する。すなわ

ちいくらかの人は過去の思想に執着するし—ほとんど

の人は多かれ少なかれ同様な立場に立つが(それ故に

その立場が当座の見解である)—わずかの人が別個の

方向において急進的であると考えられる。(より厳密

な意見としてその人は、しばしば三つのクラスに加わっている。(一)教訓の若干の分野においてラディカルである。(二)他の分野の群とともにラディカルである。(三)他の諸分野における教訓の背後でラディカルである。例えばマルサスは人口理論における指導者であつたが、価値論においてリカアルドオ派であつたし、農業については、重農主義者であつたように。(四)さて偉大な経済学者は、概してその専門に影響をなす人であるわけであるが、もしそれらの学説が、科学の系列ならびに領域の知識、見解にあまりにも大きな変革をなさしめないのであるならば、専門に対して影響をおよぼすことができると思ふべきではない。したがつて、一般的に知られない思想を人人のために採用し、また懸念するのは明らかに不可能なことであるといえる。

以上のように獨創性の意味を考察してくるスチグラー氏は、続いて獨創性は主観的には、早晚最初のもの

であるかもしれないという。それ故に偉大な経済学者達は、自己の指導的な思想を文献から發掘するよりも、むしろ一般的には發見するのである。しかしその新しい思想が、過去の、あるいは現今の獨創性から生成したかどうかは、科学にならば相異をつくらしめないものである。では一体その科学的獨創性なるものは、いかに測定されるのであろうか。われわれはこの点について、スチグラー氏の所論をうかがつてみよう。

それはまさにその人の同時代の知識に對照して測定されるべきであつて、その人が新しい思想あるいは古い思想についての新しい見込にまなこをひらくならば、科学的に重要な觀念において獨創的な経済学者であるといえる。したがつて偉大な経済学者達が、必然的に獨創的であるというのは、まぎれもなくこうした觀念においてのみいえるのであると。スミス、リカアルドオ、ジェボンス、ワルラ、マーシャルおよびケインズにおいてそのことを認めると。

ではこのような独創的な経済学者は、同時代人によつてどのように処理されるのであろうか。この点についてスチグラー氏はいふ。ほとんどありそうもないことではあるが、それらの人（独創的な経済学者）が、

同時代人によつて無視されるということ。またその上に、後の世代に対する決定的でしかも有意義な影響すらもかえりみられないということである。ではこのような場合は、何に帰因すると考えられるのか。スチグラー氏は二つの理由をあげている。すなわちそのような人は（一）彼の時代に反対して極端に調和の外に立たされていなければならない。（二）また夢想家になつて、ま

れに第一のクラス（上で紹介した三つの精神のクラス的第一をさす）（浜崎）を鋭意専念せしめるものでなければならぬ。以上の二つの理由からして次のことがいえる。そのような場合、科学的に重要な役割をになう思想の独創性は、巧妙なものであつて、一般的ないわゆる日常的なものではないということ。換言すれば極端な

急進主義でもなく、明らかに非系統化された内容でもないわけである。

このようなスチグラー氏の説明は、まさに独創的な科学的思想を普遍化との要請においてとらえるものであり、シユムペーターのいわゆる前創造物との「交叉状態」にある道具化された知識の要請と相一致するところであると考えられる。スチグラー氏は上述の二つの理由にもとづく人としてクルノーを例としてあげていふ。このような人は、後世の再発見の学説の世評を反映することによつてのみ有名になると。

二 説得技術

前章で独創性の意味を尋ねたスチグラー氏は、この章でいわゆる普遍化の技術について論述する。そのために氏は一つのケース・メソッドの設定のもとにはじめる。すなわち自分がなんらかの新しい思想を獲得し、次第に科学的に重要であると信じる陳述のうちへ

その思想を劣作するという仮設をもって考察する。そのような場合、自分はその新しい思想を比較的初期の著者達に発見するかもしれない。というのは課題に対して敏感であることはもとより、その課題に関連のある著述をより探索的にしかも感応的にながめるからである。ゆえに一次的少数独占に関する現在の私の思想を批判的に評価する意見としては次のように述べられよう。すなわち現在のこれらの思想は、一七四五年 *Süssmilch* によつて、また一八一四年 *Say* によつて提起されたのであつた。そうして後一八七〇年まで合衆国にひろまるように一般になったのである。それらの思想は決して優れた意味をもつものではない。事実もしそれらが要領をえずに利用されるなら、およそ厳しい誤謬にみちびかれるであらう。また私が充分専門化することのできない案件のもとでは、その思想は利用の面でまったくとるにたらないものとなるのである。したがつて何人も独創的な意見の調和のとれたし

かも穏やかな論述に接してはじめて、最も可能な外観を呈するものと考へなければならぬ。以上のように具体的な例をとりあげながら説明してくる *スチグラー* 氏は、思想領域における説得技術は、一般的に反復ならびに誇張的な主張であり、またつりあいのとれない強調であるという。そうして経済理論にほとんどあらゆる新しい思想の採用の先導をなし、また伴つてきているものでもある。といつても新しい思想がすべて充分なものでないことはいふまでもない。しかしながらある人の新しい思想が同時代人によつてそのまま認められなければならない。いわば誇張をもとめない並はずれな能力をもっている場合があるという。そのような学者として *スチグラー* 氏は *スミス* や *マーシャル* をあげ、まさに第一のクラスにある経済学者といえるという。このように思想の説得技術の面からとらえた場合の *スミス*、*マーシャル* に対して、その他の経済学者を、*スチグラー* 氏は種々な程度において行商人 (*hucker*) の

技術を用いる人達であるという。ジェボンスの「経済学原理」(「Theory of Political Economy」1876)における効用に關する思想の敘述の場合。ボエーム・パヴェルクの資本理論の展開方法等まさにそうである。といつてもスチグラール氏は次のことを附言する必要があるといふ。たとえ新しい経済理論が行商人の技術によつて導入されたとしても、新しいそれが単なる行商人の作業でないということ。例えばジェボンスの誠意スジセリチはあらゆる面にわたつてあとづけられているとみなければならぬ。したがつていかなるすぐれた経済学者も傑出をなしとげること信じない労作のうちに、常に意識的に思想を考案してきたとは思わない。要求される知的能力、道徳をもちあわす人人は、どこかで一層すぐれた讚美を獲得することができるのである。それに反し、成功的な考案者は偏ワンサイドマンばな人間であるといふ。ではそのような偏ばな人間はどのような意識をもつ人間なのであろうか。スチグラール氏はこの点については次

のような説明をもつてする。そのような人間は、自分の思想の正当性および意義を得心させることに心がけることはもとより、他の真理が自分の真理の一般的承認よりも重要さの点においておとつていふように考えられるために、他の真理を輕視するのである。いわば種種な思想のうちに学びとる人であるよりも、無智にさからう斗士であると。以上のような人間類型的考察との関連によつて説得技術の性格を明らかにするスチグラール氏は、この章の最後に次のことを問題とする。

思想の妥当性に關する強力な確信、精力的な普遍化が、科学的労作を有意義なものに改造するのに充分なものであると私は主張するのではない。というのは一時の流行を創ることは、単なる表現の巧妙さによつて可能なことである。しかしもしその思想がより一層永続性のある科学の標準に適するのであるならば、科学についての深遠なしかも永続的な意見がなしとげられるであらう。こうしてこれらの標準の間に真理は存

するわけであるが、もとより真理はただ一つではない。以上のように最後におよんで思想の普遍化を科学的標準なるものにかかわって説きおよんでくるスチグラー氏は実例をもつて考察をはじめめる。次章にわれわれはそれを紹介しよう。

三 ミルの場合

経済学史研究家達がしばしばミルを位置づけるのに古典派経済理論の解説者、あるいは集大成者として評価するのに積極的であつたし、また今日もそのようであることは否定できない。スチグラー氏もいうように、ミルはリカードオについての能弁な弱弱しい共鳴者に考えられているし、またこうした判断が一般的である。では一体その理由はどこに存するのであろうか。われわれはこのことについてスチグラー氏の所論から紹介してかかろう。

ミルはスミスおよびマーシャルについての透視画ペリスベクティブお

よび考量をなしながらも、十分な能力をもたなかったということ。次に成功し易いすべての術策をさけたということがまさに二十世紀において低い世評をあびる原因であると考えられる。したがって彼の経済学原理のうちに彼自身の思想を発見するには、われわれは極めて注意深い態度をもつてのぞまなければならない。ミルが誇るものの一つ、すなわち分配法則の社会的可塑性に対する生産法則の不変性は、すくなくとも適当とは思われないし、その他はまさしく誇示を認めえないのであると。

それかといって、われわれはいわゆる獨創性なるものは、彼ミルには縁遠いものといわなければならないのであろうか。すなわち単なる解説者としての評価をなげかけられるにとどまるミルなのであろうか。こうした問題になんらかの意味で新しい解答をスチグラー氏は次のように与えてくれる。

ともかく何人がミルを評価するばあいにも獨創的

あつたという点は否定されえない。すなわち彼は同一であることが見分けられる諸理論の点からして、科学史における最も独創的な経済学者の一人であつたことは否定できない。彼の貢献の一つ一つはすくなくとも彼には独創的なものであつた。というものの次のことを記憶しなければならぬ。すなわち貢献としてあげられるものが価値論に限定されるとはいへ、しかも一般に信頼されている独創性なるものが国際的貿易論においてであるとはいへ、それがいかなる点においてであつたかということである。というのはその点において私はミルの優先性についてより確信的になりうることをできるからである。

以上のようにスタグラー氏はミルに対する通俗的評価はべつとして、極めて原理的な面に反省を投じて彼を独創性なる光に照らして積極的な評価をもとめんとす。そのためにミルの名著 (*"Principles of Political Economy"*, Ashley edition) をよび論文 (*"Dissertations*

and Discussion", Vol. 5, "Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy", London, 1844) 等の文献からミルの所論を引用することによって具体的に独創性の所在を明らかにする。われわれは氏があげた項目にしたがつて紹介し氏が独創性なるものにかかわらしめていかなる意味をそれぞれにみいだしているかを尋ねてみよう。

(i) 反競争集団

まずこの項目においてスタグラー氏は「原理」の二九三頁から引用した後、次のように説明する。賃銀の相異についてのスミスの議論は、長期における労働力の充分な職業上の移動性に調和する相違に限定されていたのであつた。しかしミルは教育の費用によつて設定した移動性に対する障碍についての認識によつて、このスミスの賃銀をすぐれて進展せしめたのであつたと。

(ii) 結合財

この項では次のようにいう。ミルは結合生産の問題、すなわち固定的割合における二財あるいはそれ以上の財貨の生産の問題を形成したことであると。「原理」の五七〇頁を引用してこれの説明に当てる。

(iii) 代替費用

スチグラー氏は「原理」の四七五頁、四七九頁（地代の形成についての論議）を引用した後、地代は、土地が代替的使用をなされる場合に、社会的観点からでさえ生産費用であるという事実をミルは率直にしかも明らかな認識にたつて主張したということであるという。そしてそれゆえにマーシャルはリカード的理論からはなれるのに不意であったとみなければならぬとスチグラー氏は附言する。

(IV) 企業の経済学

さてこの項目のもとは「原理」の第一編第九章「大規模生産と小規模生産について」の所論をとらえて次のように氏は論述する。ミルのこの章は、通常の経済学

的論議にみいだされる企業規模の経済に関する最初の体系的論議である。この章を細部にわたつて分析すると、別の領域へわれわれを関心づけるであろうがそれは別としても、ミルは以下のことを認める最初の経済学者であつたということを指摘できる。すなわち人は、時代を通じて企業の種々な資産から相異なる大きさの企業費用に関する知識をみちびきだすことができるということ。以上のようにミルのいわば理論の展開過程に新しい思想をみいだすわけであるがわれわれは続いて次の項目をみよう。

(V) 供給と需要

ミルは英国経済学へスケジュールあるいは函数としての需要の概念を導入したことである。したがつて「需要供給の法則」を明瞭にしかも本質的正確性をもって主張することができたのであつた。この点を立証するためにスチグラー氏は「原理」の四四八頁を引用し吟味に呈するのである。そうしてここに展開されてい

るミルの論議は、リカアドオ経済学に対する高度に有用な附加物であつたとみななければならないという。しかもまたミルはその法則に対する Thornton の不合理な反論を問題とするに當つて、彼の道具を非常に適確に使用したとつけ加える。(ミルの "Thornton on Labour and its claims", in *Dissertations and Discussion*, Vol. 5 を指摘しよう。)

(VI) セイの法則

さて何人も周知のセイの命題に対するミルの議論について本稿の著者スチグラール氏は、獨創的であることはいうにおよばず洞察力のあるものであつたと極めて高い評価を与える。そのために前掲した論文 ("Essays on Some Unsettled Question of Political Economy", London, 1844, pp. 69-70) の一節を紹介するのである。ところでわれわれはその一節を便宜上要約してみると、セイの命題は物物交換の仮定に基礎をおく限りでは難はさみえない。しかし貨幣の使用ということを考へに

入れるならばこの命題は真理であることを中止する。……いわば貨幣導入による交換行為は分離的な二つの行為によるものとなる。このようなミルの所論にしたがつてスチグラール氏は次のようにいう。ある時代には人人は販売を急ぐことを希望し、また購買を延期することを望むかもしれない。その場合は、一般的過剰の時代であると。ついでミルの論述を引用する。すなわち循環的媒介物が用いられる場合、財貨の過剰が不可能であるためには、貨幣はそれ自体財貨として考えられねばならない。あらゆる財貨の過剰がありえないと同時に、貨幣の過剰もありえないことは明白なことである。(Ibid., p. 75) それゆゑに重商主義社会の優勢な精神をりようがする専制君主的支配で交互にふうびしている法外な不安そうして無分別な見込等に起因するところでは、セイの法則は一般的過剰、および一般的不足の實在に矛盾しない。(Ibid., p. 68) こうしたミルの所論に対してスチグラール氏は、ほぼ一八三〇年に著

述べられたこの論文が独創的でない精神にもとづく劣作といえようか。と問を發しながらも問をはさむことなく立派な獨創性を積極的に認めるのである。すなわち、ミルは新しい体系をうちたてることをなすのではなく、ただリカアルドオ体系の改良を附加することを試みたのであつた。シュムペーターがミルを一般的に性格づけしたように、経済学者のうち最も公明な人は、科学の進展にとつて、自己の能力を利己的でなく捧げることであるといえるようにと。

以上獨創性の性格と一般化の技術的な面とをミルの場合において具体的にとらえ、ある意味ではミルの経済思想上における位置に反省の機会を与えたスチグラー氏は次章において結論的な問題の提起を試みるのである。

四 獨創性と科学的進歩

われわれは科学的進歩によって何を意味するのであ

らうか。ところで經驗科学は經驗的内容に関係のある普遍化の体系であるといえる。このことから普遍化は一般的な確實性、精密性に関する認識でなければならぬ。でないと普遍化によつて基礎づけられる予言は、分析の行為であるよりもむしろ教義の行為である。とのべ、スチグラー氏は問題の提出上經驗科学自体を反省することによつて、科学は決して過去、現在の科学者達が理解しているものを表示する書物の倉庫ではなく、それらが理解するものであるという。人は専門的文獻ならびに記憶内容の諸問題をみおとすほかに、知識は忘れられるし、また忘れられてきているのである。では科学は、いかなる場合に進歩するといえるのであろうか。この吟味に當つて氏は次の四つの場合から始める。(一)新しい普遍化がみいだされる時。(二)普遍化がより一層發見可能になされる時。(三)現存の普遍化が分析的に純粹になされるその時。(四)現存の仮設が確証されるか、または誤謬であると認識された場合等

等に科学は進歩すると。ところでもしこれらの四つの契機が科学的進歩の主要な成分であるならば、もとより進歩は重要な獨創性なしに起るかもしれないことが論証されるのである。けれどもわずかながらも勤勉と専門的能力(もちろん高度な獨創性を認める)を要求する三種類の作業が科学的進歩に貢獻するのである。

このようにスチグラール氏は、科学進歩に対する獨創性を含めての専門的能力の貢獻を三つの作業型態において明らかにせんとする。第一のそれは仮設について検証すること。第二のそれは、知識の蓄積であると。さてこの第二の作業によって科学への貢獻をどのように考えているのであろうか。氏の所論を少しばかりうかがってみよう。ここで主張されることは、批判的でもかも分析的である獨創性を、しばしば、しかし必然的でなく具体化する經驗的作業の流スリムれがすぐれて理論的な革新に向上を提起してきているということである。例えば貨幣理論の發展において、主要な役割を演じます

たジェボオンス、ラスベアースにはじまった價格の歸納的研究のように。したがって理論的体系は、明らかに經驗科学が継続しているその領域においてあらわれるであろうということを入人は予知できると考えられる。今後十年において、所得分配に関する多くの所論を期待することができるように。さて第二の作業型態に続いてわれわれは第三のそれについてのスチグラール氏の見解を紹介する。さて有用であるが非獨創的な作業、これはわれわれをして經驗的作業が単なる非獨創的作業でないということを認識させるに役立つものであろう。すなわち理論の洗練あるいは精巧さは、本質的にはしばしば日常的な仕事である。大概の理論的労働が本源的に反復であり、流行によって支配されていることを雑誌の読者は周知のことである。例えば外国貿易に対して独占競争理論の適用、経済学分野へ投入量―産出量分析を適用、二個の市場からn個の市場へ價格の差別理論を普遍化する等の人人を説明るに当

つては、偶然的な個人的環境を注意しなければならぬのであつて、高い知的天賦に注意をかん起すのではない。

以上三種の型態による科学的進歩の貢献を考察してくるステグラー氏は、それら三種類の一般的なことがらとして次のことを附加する。これらのさほど独創的でない種類の経験的でも理論的な作業は、科学において明確な進歩を与えるものではない。ともかくもその進歩が不明確でありえたとしてもそれは（進歩をさす）大きなものではなかつただろうと何人も推察する状態にある。もし科学は時時覚醒されないならば、科学研究者達は活気のない、しかもはずかしめをうける奴になる傾向にある。そうして彼等は硬化した正統派学説へしらすしらすおちいつていくのである。また可能としよう何らかの種類の進歩でさえも、主張するのに失敗するのである。したがつて独創的な作業は、その作業の理論的に一貫した論争、不和、克服および

敗北等がありながらも科学的精神を主張するにはなくてはならないものに思われる。

このように科学の進歩を独創的作業との関係において考察し、後者を科学的精神の主張にとつて缺くことのできないものとみるステグラー氏は、一歩進んで独創性の性格を前者との関連のもとに究明する。すなわち独創性は改良を意味するのではなく差異を意味し、いわば新しい真理はもとより、謬見をも考察するかもしれない。したがつて科学的進歩が、独創性なしにわずかの間でも継続するならば、独創性は進歩をはばむかされない。ところで独創的作業がほとんど誤解されもするということを別としても、その作業の形成についての極端な評価が、また科学的進歩をさまたげるかもしれないということである。しかしながらすぐれてよい独創性の広範な部門に依存している進歩が、独創性の過多によつてはばまれていくことを主張するのはまさに背理に思われるかもしれない。けれども

その説明は、科学における革新の高度な評価が、革新の質に反逆するという事実にあるわけである。このようにスチグラール氏は、独創的作業を科学的進歩の条件において問い、その論理的性格として一時的にもしる「阻止性」を有する点を明らかにする。続いてわれわれはその独創的な新しい思想の性格をスチグラール氏にしたがってみよう。

新しい思想は、その思想の成熟している科学的形体にあらわれて生成するのではない。その思想は論理的な不分明さ、あるいは誤謬をふくんでいるのであって、その思想がささえられている明らかな事実は、不完全なものであり、決定的なものではないのである。そうしてその思想の適応性の領域は、ある方向においては誇張され、他の方向においては看過されているのである。こうした缺陷は専門の科学的な洗練の過程（多くの人によって多くの方向から形成された理論をばらんだ）によって漸次すくなくなっていくのである。

G. J. スチグラール「科学的進歩における独創性の性格と役割」(浜崎)

ところでこの科学的激動の過程は、速度をはやめられるのであって、まさに無数の経済学者をもつ近代において、とくにいえるのである。ただ注意を要するところは、独創的作業の生成の割合が極めて大きい場合、諸理論をほどよく老熟化させられないことである。というのは三つの理由にある。(一)諸理論は真理についての残さいをとりだすことをぬきにして放棄される。(二)それらの理論内容が整序される以前に許容される。(三)理論の適応性の範囲がかなりの正確さをもって確しかめられる以前に承認される。こうした三つの理由にもとづいて累積的ならずさんが生じるからである。(このずさんすがたは、比較的静止的な時代が老成化してゆく過程について充分取返しを認めるまでとりのぞかれぬようである。)

さて新しい思想の表現形体を時間的、空間的な論理にかかわって、その評価の様相を鮮明にするスチグラール氏はこの論文の結論的一節を経済学の過去に目を

向けながら独創的作業の性格を、いわば波瀾のうちに去来する相のうちに把えていう。科学における革新の確固とした評価について希望することがむだなことであると同様に多分浅はかなことでもあるだろう。—科学的労作の予言しえない道筋は、その労作のいわば冒險の要素にある。一八五〇年から一八七〇年へかけて経済学は、息苦しいほどのものであったし、一九〇〇年から一九一四年にかけては落着いたすがたを呈したのであった。そうして一九三〇年代においてはまさに独創性の過多が存したと考えられよう。

さて以上の論述のあとを省りみてスチグラー氏はいう。こうして論述してきた反省の意図は、何ら実利的あるいは宣伝的なそれではない。もし私が偏見をもつものであるならば、経済学における独創性の価値を誇張するということである。—われわれはもし特別に独創的でなければ立派な種種の他の労作を忘れるけれども、途方もない理論の著者達に、永遠性を附与するの

は正当とはいえない。しかし私はこのことについて何ものかを論議するというわけで以上のべたことを提議するのではないと。

〔附記〕

さてわれわれは、スチグラー氏の論文の内容を検討する必要に迫られている。がしかし、いまの場合それはおくとしてみ、次のことを述べておかなければならない。

われわれはこの論稿を紹介する問題意識を最初にのべたのであるが、経済学説史的視角、あるいは経済思想史の問題領域から把握された場合のスチグラー氏のいわゆる「独創性」なるものは、シユムペーターのいうような「道具化された知識」の内面的論理構造を時間性、空間性の両面において、いわばその客観性を原理として問い直し分析しようとするものと考えられるのではなからうか。そうして独創的な作業は、つねに普遍化の系列にかかわるものであるとする場合、スチグラー氏は独創的価値を誇張するわけにはゆかず、ミルにおけるような思想の一般化の技術のうちに横たわる独創性に価値をみいだすようになるのである。このことは「経済分析」の普遍化するにわち降化過程のうちにこそ、独創性なるものをみいだしてゆこうとする態度と考えられなければならない。

ともかく経済思想史研究、学史方法論等の分野へ問題を提起する好論文と思われる。